

さるしま junior

第7号（夏一その2）

令和3年6月14日発行

園長 小菅 哲也

諏訪幼稚園の子どもたちは絵本が大好きです！



諏訪幼稚園では、子どもたちが、自由遊びの時間やお弁当を食べ終わった後のわずかな時間に絵本を開く姿をしばしば目にします。

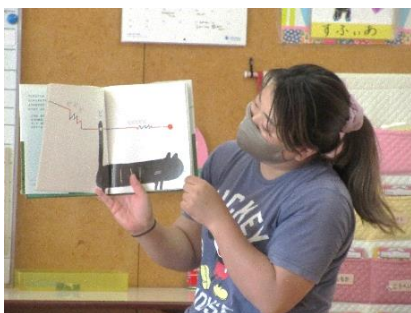
電車や働く自動車、動物、昆虫など、大好きな乗り物や生き物をじっくりと観察して情報をキャッチする子。「モコモコ」や「ビビビ」など、言葉がもつリズムの心地よさや面白さを味わう子。「アラジン」や「桃太郎」など、主人公と一緒に、時には登場人物になり切って冒険の旅に出る子。「ブタのなる木」や「カラスのカラッポ」など、ストーリーの爽快感やほのぼのとしたやさしさに心を癒される子。…その楽しみ方は十人十色です。

さらに、友達と頭を突き合わせて絵本を囲んだり、教職員の膝の上で絵本を開いたり、絵本を見ながら問題を出し合ったり、感想を語り合ったり…、仲間と一緒にだと新たな楽しみ方が生まれます。

こうした姿を見るにつけ、ご家庭や幼稚園で、子どもたちがごく自然に本や絵本に触れることを楽しんでいるのをうかがい知ることができます。



「読み聞かせ」や「お話会」はだれのため？



諏訪幼稚園では、「帰りの会」で担任による絵本や紙芝居の「読み聞かせ」が行われています。子どもたちは、毎日それを楽しみにしています。教室を訪れると、目をキラキラさせて畑中教諭の語りに聞き入っています。さらに、今年度は、月に2回、夏目教諭を中心に、教職員による「お話会」が行われています。ある時は「おなかをすかせたへび」がによりと登場したり、またある時はバックに美しい、梶山教諭のピアノ伴奏が流れたり…、奇想天外の演出が子どもたちの心をひきつけます。

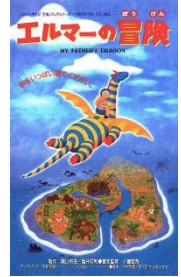
「読み聞かせ」や「お話会」。その舞台裏では、子どもたちと作品と





の出会いの時期をあれこれと考えたり、子どもたちを楽しませようと準備や練習に奮闘したりする教職員の姿が見られます。その研究熱心さは本園の誇りです。

私は、田戸小学校に勤務していた時、ひよんなことから「図書ボランティア」に加えていただきました。「朗読の達人たち」に交じって、水曜日の朝、1年1組から6年4組までの全学級を1年間かけて回りました。子どもたちの真剣なまなざしや楽しそうな笑顔に出会うたびに、「(読み聞かせを) やらせていただいてよかった」という満足感と共に「次はこうしてみたい」という新しい目標も芽生えてきました。「読み聞かせ」を通して、本や絵本の楽しさや素晴らしさをだれよりも味わい、子どもたちや達人たちに成長させてもらったひと時でした。



本や絵本も進化や成長を続けています！



世界中で人気の絵本作家・エリック・カールさんが5月末に亡くなりました。カールさんの代表作と言えば、『はらぺこあおむし』です。諏訪幼稚園でも大人気の絵本で、「読み聞かせ」にもしばしば登場します。絵本を開くと、修理に使ったセロファンテープが日に焼けて茶色く変色しているのが目に留まります。この絵本が20余年

もの間、子どもたちに大切に読み継がれてきたことを物語っています。保護者の皆さんの中にも、真ん中に真ん丸の穴を空けながら、次々にご馳走を平らげていくあおむしの姿を、ワクワクしながら見つめた思い出をお持ちの方も多いのではないでしょうか。

1969年に発表されたこの作品。実はこの50年の間に何度も作り変えられたそうです。はじめの題名は『いも虫ウイリーの1週間』でした。イモ虫がさなぎになったところで物語は終わりました。その後、あおむしが美しいちょうちよに変身するラストシーンが加えられました。ちょうちよの鮮やかな色づかいを出すために繰り返し描き直されたそうです。また、この作品が世に出た時には、丸い穴は空いていませんでした。青虫が食べたあとの丸い穴を空ける作業を請け負ったのは、日本の出版社でした。青虫がさなぎやチョウに進化するように、『はらぺこあおむし』も成長を続けてきたのですね！



本や絵本との出会いには、遅過ぎることや手遅れはありません。「対象年齢」はあっても、それにこだわる必要はまったくありません。出合った年齢や境遇、目的によって、見え方や感じ方はさまざまです。楽しさや面白さは、いたるところに数限りなく散りばめられています。家の中で過ごすことが多いこの時期、お気に入りの本をそっと開いてみてはいかがでしょうか。